

6) クチナシ=山梔子/梔子

クチナシはアカネ科の常緑低木で、中部以西の本州、四国、九州、沖縄などの山地や疎林中に見られる。高さは1~2mで初夏の頃、花茎6~7cmの芳香のある白い花を咲かせる。実は黄熟し先端には6本の突起があって、釣りをするときの「ウキ」のような形になる。和名の『口無し』の由来は、実が熟しても裂開しないことから名付けられたという。学名は『*Gardenia jasminoides* Ellis.f.*grandiflora* Makino』で、属名の『ガーディニア』は、この花を最初に記録したアメリカの植物学者A.ガーデンを記念してつけられたもので、種小辞はジャスミンに似た香り、変種名は大きな花という意味で、故牧野富太郎博士が命名している。中国名は『山梔子』(サンシシ)もしくは『梔子』で、『卮』(シ)は酒などを貯蔵する大きな容器のことで、果実の形が似ているところから名付けられた。

クチナシの実は古くから染料としても用いられてきた。やや赤みを帯びた黄色で『山梔子色』という。無害の染料で布地などを染めるほか、飛鳥時代頃からは食料などの染料としても用いられ、大分県地方の『黄飯』(オウハン)は山梔子の粉末もしくは汁を混ぜて炊いたものである。かつては兵糧米の変質を防ぐために、山梔子の煎液に米を浸してから蒸して貯蔵したという。現在でもタクアンやキントンの他、ラーメンなどを染めるのに用いられている。花は2杯酢に漬けて食用にもされ、中国ではお茶の香りをつけるのにも用いられた。漢方ではこの実を乾燥させたものを『山梔子』と呼び、3世紀頃の『神農本草経』(シンノウホンゾウキョウ)には、利尿剤や解熱、消炎、鎮静などのほかに不眠症、黄だん、出血に用いられたことが記されている。また熟果を粉末状にして、卵白をくわえて練ったものは捻挫、打撲、筋肉痛、肉離れ、腰痛、腫物などに貼ると良いとされている。

日本ではクチナシが最も早く文献に登場するのは『日本書紀』で、種子島から山梔子が献上されたことが記されている。これは染料としてか、もしくは薬草としてのものであろう。また延喜式にも「お盆」の供養料として、クチナシの名前が上げられている。一方『本草和名』にも「久知奈子」として記されており、『新撰字鏡』や『和名類聚鈔』では和名「久知奈之」と書かれている。このほかにも『駿河国風土記』や『肥前国風土記』にも「山梔子」として見えており、広く生活の中に溶け込んでいたことがうかがえる。しかし『万葉集』に見られないのは、この花がまだ鑑賞用ではなく、もっぱら染料や薬用であったためであろうか。

平安文学には『山梔子衣』がよく登場する。山梔子の染料は十分に煮出して染汁を作れば、媒染材を用いなくてもよく染着する。しかも水洗に対しても色褪せすることがなく、酸にもアルカリにも特別の反応を起こさないところから、好んでこの色の衣を着ることが多かった。このことはまた他の色とあわせて染色するときには大いにプラスになった。というのは酸処理を絶対に必要とする『紅花』との交染に

おいて黄色を得るためには、ほとんど代替ができず、山梔子が用いられたのである。このために染料としての価値は想像以上に大きかった。

もう団塊以上の方であれば、くちなしというとまず思い出すのは渡哲也氏が歌っていた『くちなしの花』かも知れない。遠藤実氏の作曲で水木かおる氏作詞のいい歌だった。

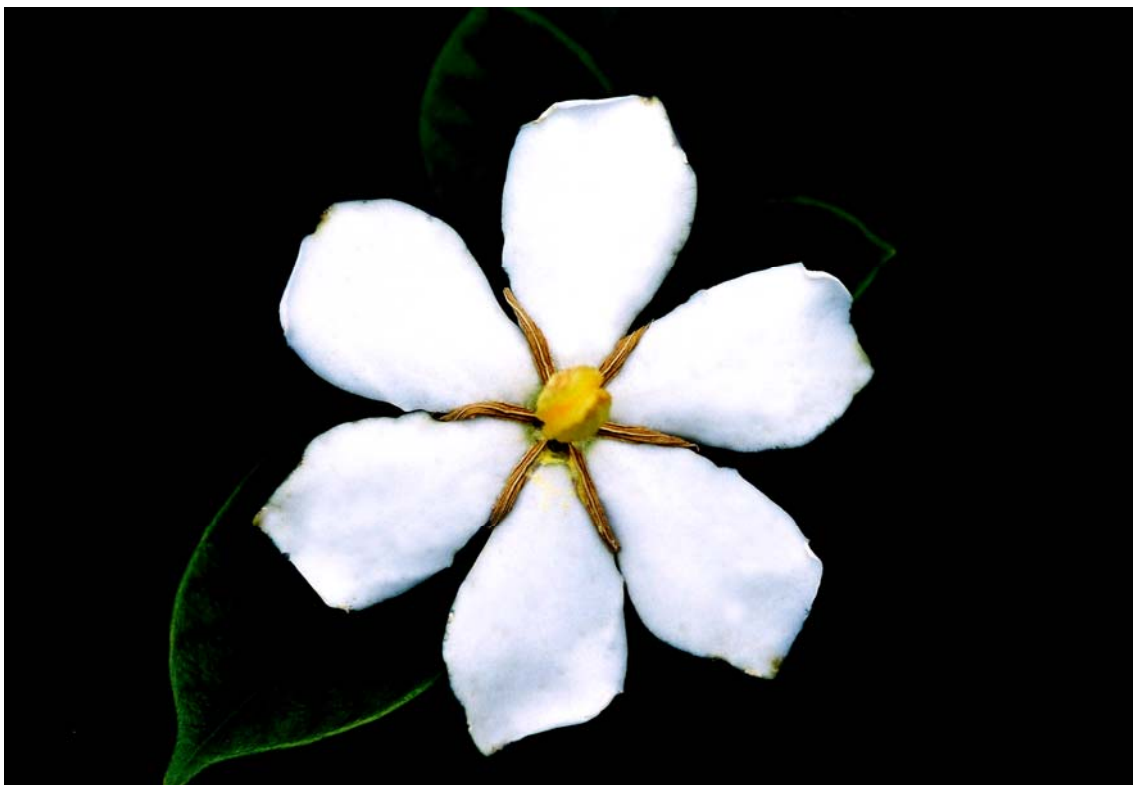
くちなしの花

今では指輪も まわるほど
 やせてやつれた おまえのうわさ
 くちなしの花の 花の香りが
 旅路のはてまで ついてくる
 くちなしの白い花
 おまえのような 花だった

わがまま云っては 困らせた
 子供みたいな あの日のお前
 くちなしの雨の 雨の別れが
 今でもこころを しめつける
 くちなしの白い花
 おまえのような 花だった

小さなしあわせ それさえも
 捨ててしまった 自分の手から
 くちなしの花を 花をみるたび
 淋しい笑顔が また浮かぶ
 くちなしの白い花
 おまえのような 花だった

クちなシの香りは花が単純な一重のものほど強く、ガーディニアといわれている大型の八重咲のものになると香りは弱くなってしまふ。従って品種を選定するときには香りを楽しむのか、花を見るのかをまず確認する必要がある。花の香りを大切にす中国では梅、百合、菊、桂花、茉莉花、水仙とともに七香として貴ばれている。ヨーロッパではコサージュやブーケにしたり、タヒチの女性もこの花を髪に飾ることが多い。繁殖は挿し木でよく着く。特に手入れをしなくてもよいが、青虫(オオスカシバという蛾の幼虫)が着くので時々捕殺する必要がある。



香りの素晴らしい一重咲のクチナシ。学名の種小辞はジャスミンのような香りがするという意味である(埼玉県川口市植物振興センター安行見本園)。



達磨葉クチナシも香りが素晴らしい(東京都小平市薬用植物園)。



クチナシは意外と種類が多いものの、どれも白い花を咲かせるため区別しにくい。しかし花卉が八重だったり一重だったり、小輪だったり大輪だったり。香りも必ずしも同一ではない。一般的に共通することは八重咲種よりも一重咲種のほうが、強い香りを放つことだろうか。



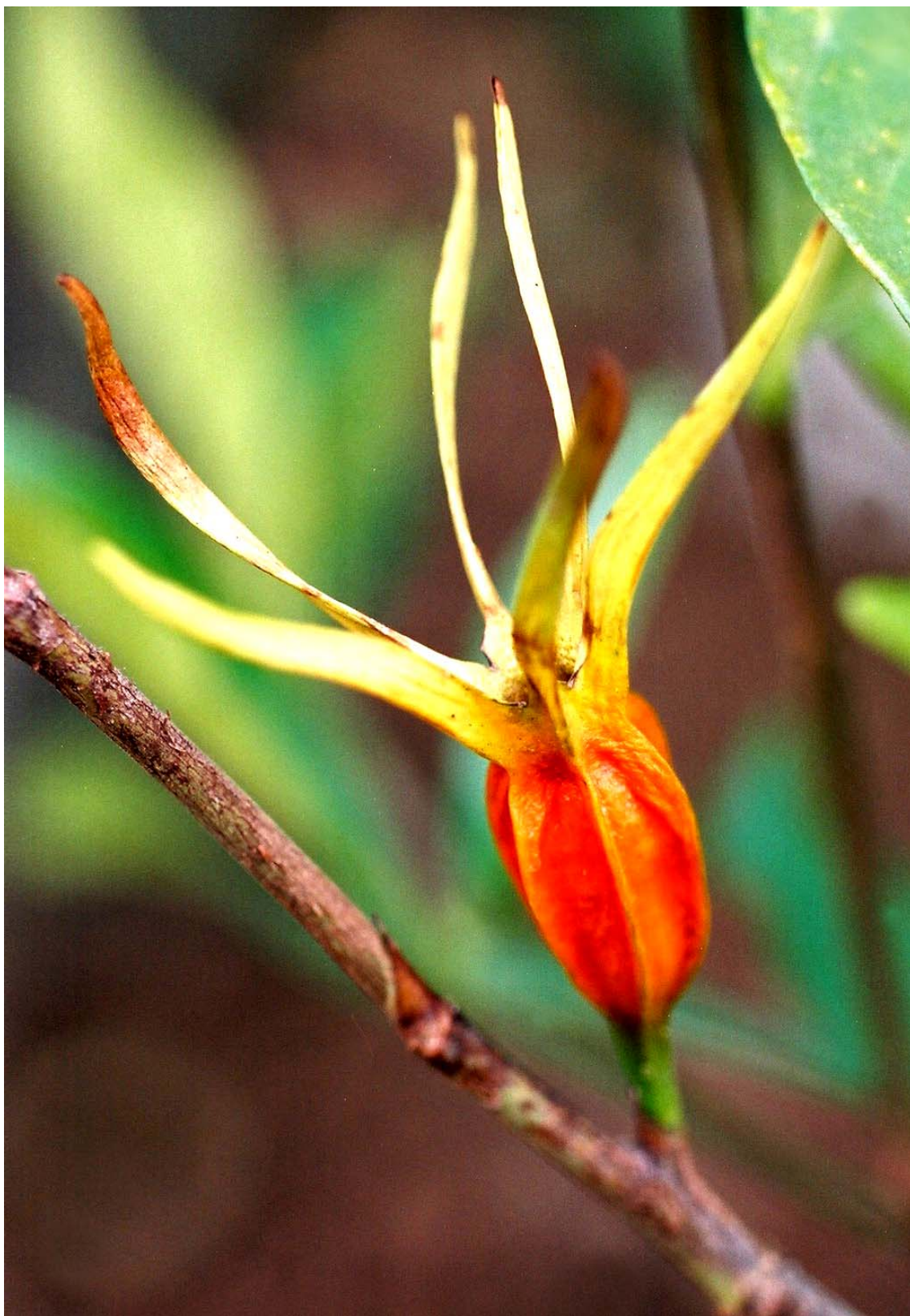
これは小輪のクチナシで八重咲だが、香りも素晴らしかった(さいたま市浦和区)。



八重咲クチナシで有名なのは下記に記した「ガーディニア」という種類である。写真のものは香りがよく八重咲きのもので、日本産であるが詳しい出自は不明である(神代植物公園)。



大きな花を咲かせる西洋クチナシのガーディニア。花は素晴らしいが香はもう一つである。



クチナシの果実。中国名は『山榧子(サンシ)』で、榧は酒を盛る大きな容器のことである。この種子に形状が似ているために名づけられたという(埼玉県川口市植物振興センター)。

[目次に戻る](#)